フロントランナーに聞く 教育のnext 第4回

新型コロナウイルスの世界的な感染拡大により、予測困難な社会が現実のものとなった今、
未来の社会を築く子どもたちの教育を、どのように描いていけばよいのでしょうか。
本連載では、教育の最先端で活躍する人たちへのインタビューから、次代の教育のあり方に迫ります。
第4回は、生まれ育った地域や家庭などの環境に左右されずに、
すべての子どもが未来をつくりだす意欲と創造性を育める社会の実現を目指し、多様な活動を続ける
認定特定非営利活動法人（以下、認定NPO法人）カタリバの代表理事を務める今村久美氏にお話を聞きました。

子どもが多様な価値観に出会えるよう、みんなで子どもを支える社会に

認定NPO法人カタリバ 代表理事
今村久美

いまむら・くみ　2001年の大学在学中にNPOカタリバを設立し、高校生のためのキャリア学習プログラム「カタリ場」を開始。2011年の東日本大震災以降は、支援の対象を小・中学生にも広げて、学びの場と居場所を提供。2020年には、経済的事情を抱える家庭にパソコンと無線LAN機器を無償貸与し、学習支援を行う「キッカケプログラム」を開始するなど、社会の変化に応じて様々な活動に取り組む。公益社団法人ハタチ基金代表理事。一般財団法人地域・教育魅力化プラットフォーム理事。ほかに、文部科学省中央教育審議会委員、経済産業省産業構造審議会委員も務める。

キーワード 1

社会にある「目に見えない階層」

――代表理事を務めている認定NPO法人カタリバでは、地震や水害の被災地で放課後学校を開いたり、昨春の一斉休校期間中にはいち早くネット上に子どもの居場所を開設したりと、子どもを直接支援する活動をされています。どのような思いで活動されているのでしょうか。

今村　生まれ育った地域や家庭などの環境によって、子どもの将来の可能性が大きく左右される状況があってはならないという考えが、私たちの活動の根底にあります。震災があったから夢を諦めた、家庭が経済的に厳しいからオンライン授業を受けられなかったといったことで、子どもが自らの可能性を閉ざすことなく、自分のやりたいことに挑戦できる社会を実現したいという思いです。

そうした思いの背景には、私自身の経験があります。私の故郷は、岐阜県の飛騨高山です。小・中学校、高校と、学校では家庭環境や価値観、そして、学力が多様な子どもが一緒に学んでいました。ところが、東京の大学に進学すると、そこには経済的に恵まれ、学力水準が高く、自己肯定感も高い学生ばかりが集まっているように感じました。私は、周りの学生のハイレベルな会話についていけずに、自信を失うことも度々ありました。

一方で、大学には、誰もが自分の考えを発言し合える心理的安全性が確保された環境があり、周りの人たちは私の話に耳を傾けてくれました。次第に、そうしたコミュニティーで議論したり学び合ったりすることに面白さを感じるようになり、私は自信を持って様々な活動に挑戦できるようになっていったのです。

大学進学を機に高校までとは異なるコミュニティーを経験した私は、日本の社会には「目に見えない階層」があるのかもしれないと思うようになりました。どの階層に属するのかは、それまでに受けた教育の機会や投資など、保護者の教育観や経済力に大きく左右されるのではないかと考え、そうした生まれ育った環境によって、将来の可能性に大きな違いが生じてしまうことに違和感を抱いたのです。

私の場合は、大学で異なる階層とつながったことで、今の道を見いだせました。ただ、誰もがそうした経験をできるとは限りません。１つの階層で過ごしていると、固定的な考えにとらわれがちになります。ですから、子どもが学校以外の多様な人たちとかかわる機会を設け、それぞれが考えや経験を述べ合う対話を通じて、気づきを促したり、経験を共有したりして、多様な価値観に出会って学び合うことが、とても大切ではないかと考えています。

キーワード 2

友だちや先生以外の「ナナメの関係」

――多様な人たちが子どもにかかわるとは、どういったことでしょうか。

今村　子どもは、保護者や教員という「タテ」の関係の人たちや、同世代の友だちという「ヨコ」の関係の人たちと多くの時間を過ごします。特に思春期の子どもは、タテの関係の人には心を閉ざしやすく、ヨコの関係の人には同調圧力で悩みやすいといった特性があります。そこで重要になるのは、タテでもヨコでもない「ナナメの関係」（**右図**）の人たちです。保護者・教員・友だちではない第三者がかかわることで、子どもは別の視点を持てるようになり、それが自分の世界を広げるきっかけになるでしょう。

特に現代では、多くの子どもがSNSを利用し、今いる場所に関係なく、24時間365日、友だちとつながっています。よくも悪くも同じコミュニティーの中にずっといて、ほかのことが見えにくくなっているのです。ですから、なおさら第三者の存在が重要になるのではないでしょうか。

――「ナナメの関係」は、どうすれば築けますか。

今村　今こそ、さらなる社会との連携が必要だと思います。学校では地域と一緒に様々な取り組みをされていると思いますが、地域の人たちとの一時的な活動や行事を発展させて、日常的に子どもたちに声をかけられる距離感をどうつくっていくかが課題だと捉えています。

地域の人たちの中でも、とりわけ子どもと年齢が近い大学生は、「ナナメの関係」を築きやすい存在です。自分の少し先を行く先輩という間柄だからこそ、自分の将来と重ね合わせてロールモデルとして見られますし、利害関係がないため安心して何でも話せる存在になりやすいからです。

カタリバでは、大学生のスタッフが中学校や高校を訪問し、中・高生と本音で語り合う「カタリ場」という活動を行ってきました。スタッフと中・高生が車座になり、スタッフが自分の進路選択時の不安や挫折した体験を話すと、生徒たちはそれに共感し、自分の内面を見つめたり、外の世界に目を向けたりするようになる姿が見られます。

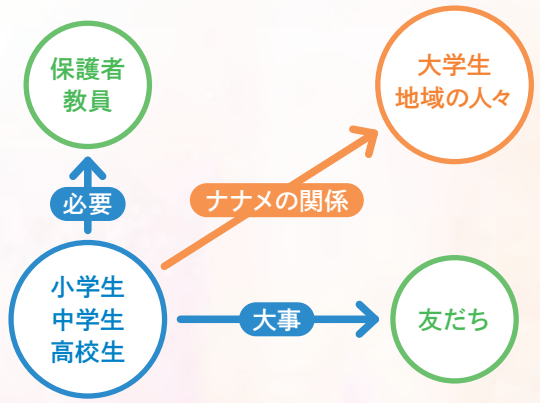
東日本大震災の際には、宮城県女川（おながわ）町と岩手県大槌（おおつち）町に小学生から高校生までの居場所を設け、多くの大学生スタッフとともに運営してきました。子どもたちは厳しい状況に直面して様々な悩みを抱えていましたが、経済的・精神的に疲弊している周囲の大人には遠慮して相談しづらいようでした。そうした状況下でも、「ナナメの関係」だからこそ、スタッフには本音を話せたという子どもが大勢いたのです。

――「ナナメの関係」は、子どもの成長に大きな影響力があるのですね。

今村　スタッフの大半は、いわば普通の若者です。子どもと年齢が近く、少し前まで自分も子どもだったからこそ、子どもと同じ目線で話を聞き、悩みなどを素早く察知して学校と連携するといった支援を行いやすいと考えています。

経済的に厳しい家庭や被災地といった特定の環境下にある子どもの支援は大切ですが、社会的に恵まれた環境にいて進学校に通う子どもにも悩みは尽きません。自分が帰属するコミュニティーの外側とつながることで、それまで気づかなかった価値観に出会えたら、自分の新しい可能性を見いだせるかもしれません。そして、どのような環境で育ったとしても、将来的にリーダーを目指すような人材ほど、社会の多様な人たちとのつながりを持つ経験が重要になるのではないでしょうか。

●「ナナメの関係」とは？



利害関係のある保護者でも教員でもなく、同じ視点になりがちな友だちでもない、少し年上の先輩となる大学生や、自分の住む地域の人々から刺激を受けることで、子どもを動機づけることができる。
※今村氏の提供資料を基に編集部で作成。

今村氏が設立した

認定NPO法人カタリバとは？

すべての10代が、未来をつくり出す意欲と創造性を育むことをミッションとして、多様な活動を展開している。設立以来行っている中・高生のキャリア教育プログラム「カタリ場」のほかに、被災によって生活環境や学校生活が変わってしまった子どもたちに学習と体験活動を届ける放課後施設、学校や塾とは違うことに挑戦できるサードプレイス（第三の居場所）、家庭環境等に課題を抱える子どもたちに学習支援や食事支援を行う居場所などを提供し、子どもの状況に応じた支援活動を行っている。

2020年3月の一斉休校以降は、オンラインツールを活用した支援も展開。自宅で過ごす小・中学・高校生に様々な経験やつながりを届けるオンライン広場を開設した。経済的な事情を抱える子どもには、パソコンや無線LAN機器を無償貸与し、学びの機会を届けている。不登校支援にも力を注いでおり、リアルとオンラインの支援を融合させた「シェア型オンライン教育支援センター」を複数の自治体と試行中だ。

◎オンライン教育支援センター「カタリバセンター」に関するお問い合わせ先　メールアドレス：center@katariba.net

◎カタリバの活動の詳細は、下記ウェブサイトをご覧ください。
https://www.katariba.or.jp/

キーワード 3

リアルとオンラインの融合

――認定NPO法人カタリバでは、オンラインツールを活用した不登校支援にも力を注がれています。子どもたちにどういった支援が大切だと感じていますか。

今村　2015年度から、島根県雲南市の教育支援センターの運営を受託して不登校の子どもの支援に取り組んでいます。そこでも大切にしているのが、子どもが安心できる居場所の提供と、何でも話せる人との関係を築くことです。

不登校の子どもの支援は、子どもとの信頼関係を構築することが出発点となりますから、最初はカタリバのスタッフが学校の先生と一緒に家庭訪問をします。そして、ある程度の信頼関係を築けると、そこからはスタッフが単独でオンラインによる定期的なコミュニケーションを図り、その子どもに応じた支援に重点を置いていきます。

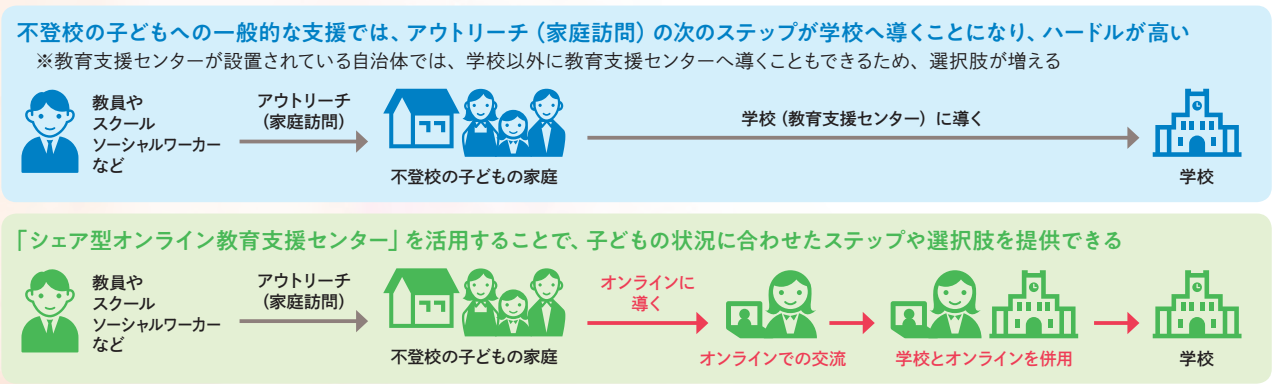
同市は、東京都23区ほどの面積に小・中学校計22校が点在します。どの学校も校区が広いため、教員が継続的に訪問し、対面で支援することが難しく、不登校の子どもは家庭以外のつながりがない状態に陥りやすいといった課題がありました。そこで、オンラインの仕組みを取り入れ、まずはスタッフが定期的かつ継続的に声をかけられるようにしました。訪問しなくても、家庭の外に安心できる居場所をつくり、家族以外の人といろいろ話をしながら、その子に応じた支援をしやすくしたのです。

その結果、不登校の子どもの約7割が学校に行くようになりました。オンラインを卒業してリアルな外とのつながりができた後は、学校や教育支援センターが対面でその子に応じた支援を継続し、個に応じた学びにつなげています。

――リアルとオンラインの融合が、子どもの状況に応じた支援の鍵となるのですね。

今村　2021年度は、雲南市の取り組みを基に、複数の自治体と「シェア型オンライン教育支援センター」（**下図**）を試行しています。オンラインならスタッフの稼働場所は問われませんから、自治体の枠組みを超えた連携がしやすくなり、リソースが十分でない自治体や学校でも、個に応じた学びの提供が可能になります。この仕組みが全国の自治体に広がることで、「全国にオンラインでつながる仲間がいる」といった状況を生み出し、子どもの自信や成長に結びつけることができるのではないかと期待しています。

●「シェア型オンライン教育支援センター」の仕組み　※ウェブサイト『VIEW n-express』に、今村氏の詳しい解説動画があります。



※今村氏の提供資料を基に編集部で作成。

キーワード 4

自ら環境を変えていく力

――小学生から大学生までの子どもにかかわる中で、これからの社会ではどのような力が求められると考えますか。

今村　時代や社会の変化に合わせて、自ら環境を変えていく力が重要になるのではないでしょうか。例えば、カタリバでは、高校生が主体となり、学校や保護者、自治体と連携しながら校則を見直す活動を支援しました。ここ数年、行き過ぎた生活指導を問題視する報道を目にします。報道では、学校の古い体質を指摘する論調が目立ちますが、先生方に話を聞くと、個人としては子どもと同じ問題意識の方もいました。それならば、「生徒主体で学校全体で話し合い、社会の変化に応じた新しい校則をデザインし、学校を再定義してはどうか」と提案し、その活動を支援しました。

コロナ禍は、多くの当たり前を見直す機会となりました。変化が求められる時に大事なのは、自由に意見を出し合うことが許容される雰囲気の中で、自ら積極的にアイデアを出したり、ほかの人のアイデアを応援したりする力だと考えます。前述の活動では、「この校則をこう変えたら困る人はいるか」など、多様な視点で話し合い、学校のルールを決めていきました。自分たちの環境を自ら変えていく経験を通し、みんながそれぞれの自由を認め合い、明日が楽しみだと思える社会をつくる練習ができたと感じています。

キーワード 5

学校教育と社会教育の連携

――多くの教育委員会や学校ともお話しされてきたと思います。次代の教育を築くために何が必要でしょうか。

今村　全国の自治体で教員志望者の確保が課題となる中、教員一人ひとりが最大限に力を発揮できるチームづくりに一層重点を置くべきではないかと考えています。自由な発言が受け入れられる心理的安全性の確保は、子どもだけでなく大人にとっても大切で、人材育成において重要な視点

自由に発言できる心理的安全性の確保は、子どもだけでなく、大人にとっても大切です

です。私たちの団体では、スタッフの間に自然に対話が生まれるような雰囲気をつくるとともに、１対１での対話を繰り返しています。その人の実践に具体的なフィードバックをして、力を引き出すためですが、それには互いに話を聞き、言い合える環境が必要です。

社会教育との連携も、学校教育を充実させる鍵を握るでしょう。探究学習や不登校の支援では、社会教育のリソースの活用が、より有効な活動や支援につながるからです。

昨年、私たちの団体の求人募集に約1,500人の応募があったことからも、教育に貢献したいという人は多いと感じています。多様な人材を教育の力としていくためには、学校外の団体や企業が活動を充実させるとともに、学校も多様な人材を受け入れる場所であってほしいと思っています。

そのような柔軟な姿勢や組織体制があれば、学びの場は学校にとどまらず、地域の図書館やオンライン授業など、選択肢が増えるはずです。そして、その先には、みんなで子どもを支える社会が実現するのではないでしょうか。

今村氏とウェブ上で対話しませんか

From the front-runner

本誌では語り尽くせなかったお話を動画でご視聴いただけます。

To the front-runner

今村氏へのご質問や、ご意見・ご感想をお寄せください。本コーナーの内容に関することのほか、認定 NPO 法人カタリバの活動に関するものも大歓迎です。今村氏ご自身からの回答はウェブサイト上に公開します。

※ご質問内容によっては、公開を控える場合もございます。ご了承ください。

Web VIEWn-express もご覧ください

ベネッセ教育総合研究所のウェブサイト内の『VIEW n-express』コーナーでは、今村氏のメッセージ動画をご覧いただけます。今村氏へのご質問も受け付けています。

VIEW　n-express　検索

右記の２次元コードから動画と質問フォームのページにダイレクトにアクセスできます。▶▶▶